

中学・高校の部活動が生徒の自己形成に及ぼす影響
—自己指導能力に関する大学生の自己認識を通して—
The Influence of Club Activities in Junior and Senior High School
on Self-Formation of Students:
Through Self-Awareness of University Students
on Self-Instruction Activity.

小川 潔 岡田 大爾
Kiyoshi OGAWA Daiji OKADA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』
“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”
ISSN:1884-9482

第9号 抜刷
Off Print of the 9th Edition

広島国際大学 心理科学部 教職教室
Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2017年 12月
December, 2017

中学・高校の部活動が生徒の自己形成に及ぼす影響

—自己指導能力に関する大学生の自己認識を通して—

広島国際大学 非常勤講師 小川 潔
広島国際大学 心理科学部 教職教室 岡田 大爾

要旨：教育の目的に「人格の完成を目指す」とある。特別活動の趣旨に関連した中学校・高等学校における部活動は、大学生の人格の完成に結びつく自己形成にどう影響したのか、大学の授業で振り返る演習を行い、部活動の意義及び課題を分析する中で明らかにした。部活動調査において、自己指導能力を育成する生徒指導の機能等と関連して、自分の成長をどう自己認識しているか明らかにする。さらに、アクティブラーニングの主体的な学び等の要素が、どのように生まれ、自己形成し認識されているのか、自ら考え自ら判断し実行するといった自己指導能力と関連して、成果と課題を分析した。自己形成には、「自己存在感」「共感的人間関係」が機能している一方で、主体的な学びに重要な振り返りの場の機能に係る課題が見出された。

はじめに—問題の所在—

部活動は教育課程外の活動ではあるが、スポーツや文化活動など、教科を超え、生徒の興味・関心を主題とした活動であり、多くの中学生・高校生にとって学校生活にとどまらず日常生活においても大きな部分を占めている。また、異年齢集団を形成し、教師による指導を受け、通常教育課程での活動では得難い、幅広く深い対人関係や集団活動経験を積む重要な機会となり、多様な特徴や幅広いつながりを持つ活動の場である^{1,2}。そこで自己指導能力の育成を目指した指導の影響を受けて育まれた自己形成が人格形成に繋がっているか明らかにする。さらに、アクティブラーニングの視点から、これから求められる資質・能力の育成に繋がる要素との関係を見出し、これらの成果と課題を明らかにする³。

1. 学習指導要領における部活動の扱い^{4,5}

教育の目的は人格の完成をめざし、社会の形成者の育成を図ることにある。集団の中で自分の個性を発見し、他人の尊重と同時に自分の調和といった集団と個人の相互作用により、自主性に基づき直面する問題を解決する能力を養う。これは部活動の目的に通じる。

部活動については、現在、平成20年1月中央教育審議会答申⁶を受けた中学校学習指導要領（平成20年改訂）で、第1章総則第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項2（12）に「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」と記載されている⁷。高等学校では、

平成 21 年改訂で、第 1 章総則第 5 款教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項の 5 教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項(13)に記載されている⁸。

歴史を振り返ると、1969 年（昭和 44 年）・1970 年（昭和 45 年）改訂で、それまで希望者で行われていた部活動の意義を踏まえて、全ての生徒に経験させる観点から必修クラブが設けられ教育課程に属する活動であった。しかし、1989 年（平成元年）改訂で「部活動への参加をもってクラブの一部又は全部の履修に替えることができる」（部活動代替措置）となり、平成元年から平成 10 年改訂までの間、部活動は、クラブ活動の代替えという形で課外活動という扱いとなり、放課後や休日という教員の勤務時間外に行われる活動となった。小学校では学習指導要領「特別活動」（第 4 学年以上でクラブ活動）の一領域である⁹。

そして、学校週 5 日制完全実施に向け、中学校では平成 10 年、高等学校では平成 11 年改訂の学習指導要領で必修のクラブ活動は廃止となり、特別活動から削除され、現在のよように各学校の実態に応じ、課外活動の一環として部活動が行われている。

ところが、平成 10 年改訂後、部活動の編成・実施上の問題点が多く指摘されるようになった。つまり、学校の小規模化の進行、生徒の参加意欲や指導者不足等の課題などへの対応の必要性が高まってきた。そこで平成 20 年 1 月中央教育審議会答申の中で、「部活動、これが中学校、高等学校の教育の中で非常に大きな役割を果たしてきているということで、教育課程に関連する事項として学習指導要領の中で記述する必要があるのではないか」という指摘があり⁶、これを受け、平成 20 年 3 月学習指導要領改訂では、「部活動について、学校教育の一環として教育課程との関連、これを図ること、あるいは、地域の人々あるいは各種団体との連携、そういうもので運用上の工夫を行うこと」など、配慮事項という形で新しく記載された。学習指導要領に部活動の意義や留意点などを記載することによって部活動が各学校において一層活発に行われることが期待できるとされ、教育課程外の活動ながら学校教育の一環として教育課程に関連する事項に位置付けられた。

特別活動から総則への位置づけの変更が行われたことは、再び学習指導要領に明確化されたとともに、部活動の教育的な意義が再確認された。また、学校の管理下の教育活動として適切な取り扱いが求められ、生徒指導及び安全管理の重要性が増したこととなった。

2. 研究方法

2.1 調査対象の学生について

部活動体験に係る調査対象は、筆者（小川）が担当する共通科目「教育学」と保育学専攻科目「教育原理」の学生である。学部構成は表 1 に示す。平成 29 年度前期受講の 104 名（出身：12 県，87 中学校，68 高等学校）である。

2.2 調査用紙について^{10, 11, 12, 13}

授業において、教育課程、学習指導要領、特別活動、生徒指導について学ぶ中で、教育基本法第 1 条と特別活動の目標「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員として

表 1 調査対象の学部構成

授業	学部	男子	女子
教育学	看護学部	4	45
	薬学部	6	20
	総合リハビリテーション学部	3	3
	医療栄養学部	1	1
	医療福祉学部	0	2
	心理学部	1	0
教育原理	医療福祉学部	5	13
男女別計		20	84
合計		104	

★調査対象…12県，87中学校，68高等学校

学部： _____ 学科： _____ 学年： _____年 (男・女)

中学校学習指導要領によると特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間として(自己)の生き方〔在り方生き方〕についての自覚(考え)を深め、自己を生かす能力を養う。」とされています。()内は小学校、[]内は高校

また、第1章総則・第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項の2(13)に「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」とあります。

中学校・高等学校の部活動について振り返り考えてみましょう。

【中学校】

1. 部活動の所属状況について答えてください。○印で答えてください。

部活動に入っていた		部活動に入っていなかった	
試合や発表会などへの参加			
ほとんど出場	たまに出場	途中で退部	初めから入らない
部名： _____		部名： _____	

2. 部活動に入っていた人は答えて下さい。選んだ理由を答えてください。

- ア. 身体を鍛える。 イ. 特技を伸ばす。 ウ. 精神力をつける。 エ. 全員加入。
 オ. 友達のすすめ。 カ. 家族のすすめ。 キ. 勉強に役立つ。 ク. 先生のすすめ。
 ケ. 進路に役立つ。 コ. その他 ()

3. 途中退部或いは入部しなかった理由を、教えてください。(自由回答)

4. 活動内容について、4段階で答えてください。当てはまる番号を○印で囲んでください。

1：全然あてはまらない (40%未満)	2：あてはまらない (40%以上 60%未満)
3：あてはまる (60%以上 80%未満)	4：とてもあてはまる (80%以上)

- | | | | | |
|-------------------------------|---|---|---|---|
| ①大会や発表会などで部の成績を高める。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ②活動「目標」がはっきり決まっている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③活動「計画」が適切に決まっている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④活動後、振り返りの会や書く活動がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤練習時間が十分である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥技術の差に応じて、できる部員がどんどん活躍する場がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦顧問の先生に知識や技術の指導力がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧顧問の先生は社会性や人間性の育成を大切にしている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨顧問の先生は部活動に出席する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩顧問の先生は人生の良き手本である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑪部員の個性が尊重されている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑫技術の差に関係なく、部員全員が活躍できる場がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑬部が楽しい活動である。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑭部員が自主的に活動する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑮安全管理や事故防止がしっかりしている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑯休養が十分取れる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑰勉強と両立できる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑱活動場所や施設が整っている。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑲外部指導者の協力がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑳保護者・地域からの支援や協力がある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

5. 部活動を通して得られたものは何ですか。3つ選んでください。

- ア. 自主性 イ. 責任感 ウ. 忍耐力 エ. 協調性 オ. ルールを守る習慣
 カ. 友だちとの関わり キ. 自分の居場所 ク. 先輩や後輩との関わり ケ. 連帯感
 コ. 心身のリフレッシュ サ. 自分が必要とされている感じ シ. 部活動に関する知識や技術
 ス. 体力・運動能力 セ. 特技・趣味 ソ. 選手や発表者としての実績
 タ. その他 ()

自分の人生を変えたこと

★今一度、振り返って、良かったこと、望むこと、或いは、問題点を書いてください。

図1 調査用紙 (自己を振り返る)

よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間として（自己）の生き方〔在り方生き方〕についての自覚（考え）を深め、自己を生かす能力を養う。」及び生徒指導の充実を確認した。次に、第1章総則・第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項の2(13)に基づき、「生徒の自主的、自発的な参加」「スポーツや文化及び科学等への親しみ」「学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等」「地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携」など、学校教育の一環性や運営上の工夫点について演習を通して確認した。

以上のことを踏まえて、中学校及び高等学校における部活動体験について振り返り（図1）、自己の人間形成にどのような影響があったか見つめ直し自己理解と共に部活動の意義及び役割と課題を確認した。

3. 結果と考察

3.1 中学校・高等学校における活動状況

中学校・高等学校の活動状況は表2に示す。中学校95名(91.3%)高等学校78名(75.0%)が3年間活動し、中学校85名(81.7%)、高等学校71名(68.2%)が試合や発表会など経験している。一方、途中退部は、中学校4名(3.8%)、高等学校9名(8.7%)であり、入学しなかった学生は、中学校で5名(4.8%)、高等学校で17名(16.3%)であった。中学校8割、

表2 中学校・高等学校における活動状況

中学校			男	%	女	%	男女合計	%
部活動に入っていた	試合や発表会などへの参加	ほとんど出場	14	70.0%	71	84.5%	85	81.7%
		たまたま出場	4	20.0%	6	7.1%	10	9.6%
部活動に入っていなかった		途中で退部	0	0.0%	4	4.8%	4	3.8%
		初めから入らない	2	10.0%	3	3.6%	5	4.8%
男女別合計			20		84		104	

高等学校			男	%	女	%	男女合計	%
部活動に入っていた	試合や発表会などへの参加	ほとんど出場	11	55.0%	60	71.4%	71	68.3%
		たまたま出場	1	5.0%	6	7.1%	7	6.7%
部活動に入っていなかった		途中で退部	2	10.0%	7	8.3%	9	8.7%
		初めから入らない	6	30.0%	11	13.1%	17	16.3%
男女別合計			20		84		104	

高等学校7割、試合や発表の場が与えられている。

3.2 部活動に入った理由

部活動に入った理由について図2に示す。中学校では、特技を伸ばす(31.3%)、身体を鍛える(25.3%)、友達のすすめ(25.3%)が多く、身体を鍛える、特技を伸ばすなど、自発的な意識、友達関係及び全員入部制の影響が強いことが認められた。

高等学校では、特技を伸ばす(28.7%)、身体を鍛える(24.1%)、友達のすすめ(21.8%)が多く、次に、精神力をつける(17.2%)、進路に役立つ(11.5%)と、将来を見据えた自己の成長への意識も強いことが認められた。その他(23.0%)のほとんどはスポーツ推薦によるものである。

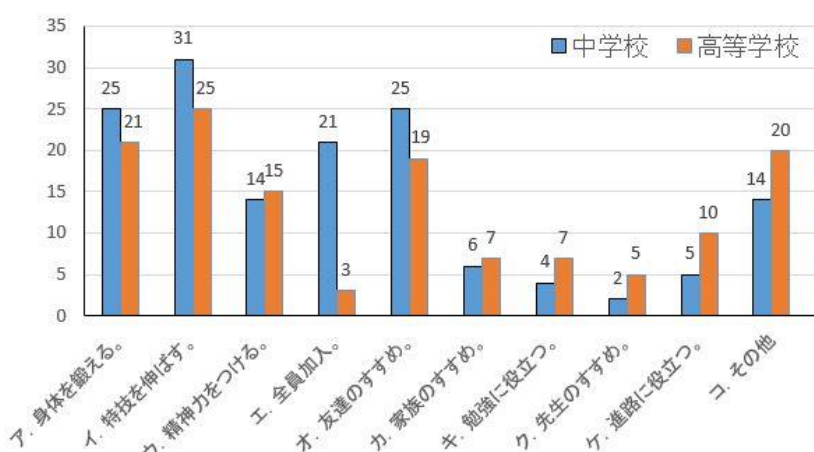


図2 部活動に入った理由

3.3 部活動で得られたもの

部活動によって得られたものについては図3に示す。中学校では、忍耐力(49.5%)、先輩や後輩との関わり(48.5%)、責任感(44.4%)、協調性(41.4%)が多く、次に、友だちとの関わり(36.4%)、連帯感(26.3%)であった。

高等学校では、責任感(42.5%)、忍耐力(37.9%)、協調性(34.5%)、先輩や後輩との関わり(33.3%)が多く、連帯感(18.4%)、部活動に関する知識や技術(18.4%)、体力・運動能力(16.1%)、心身のリフレッシュ

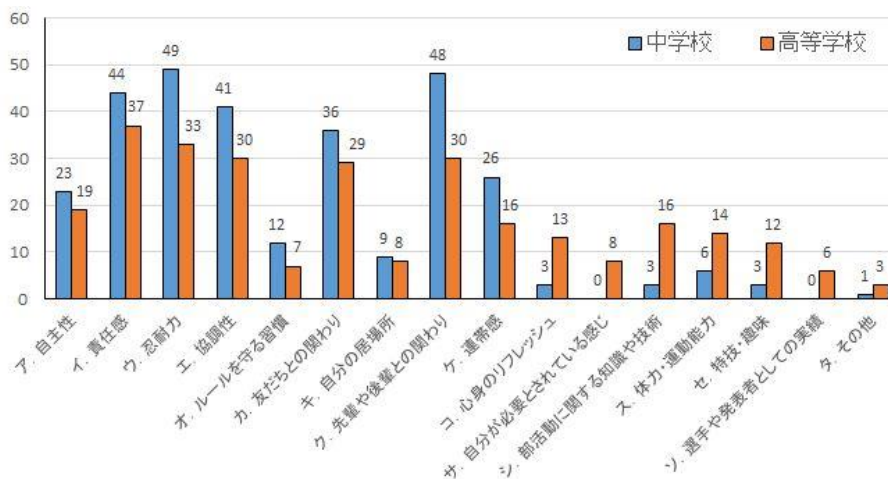


図3 部活動で得られたもの

(14.9%)、特技・趣味(13.8%)、自分が必要とされている感じ(9.2%)と、中学校に比べ自己形成を認識している場が多岐に渡って図られていることが考えられる。

3.4 活動内容

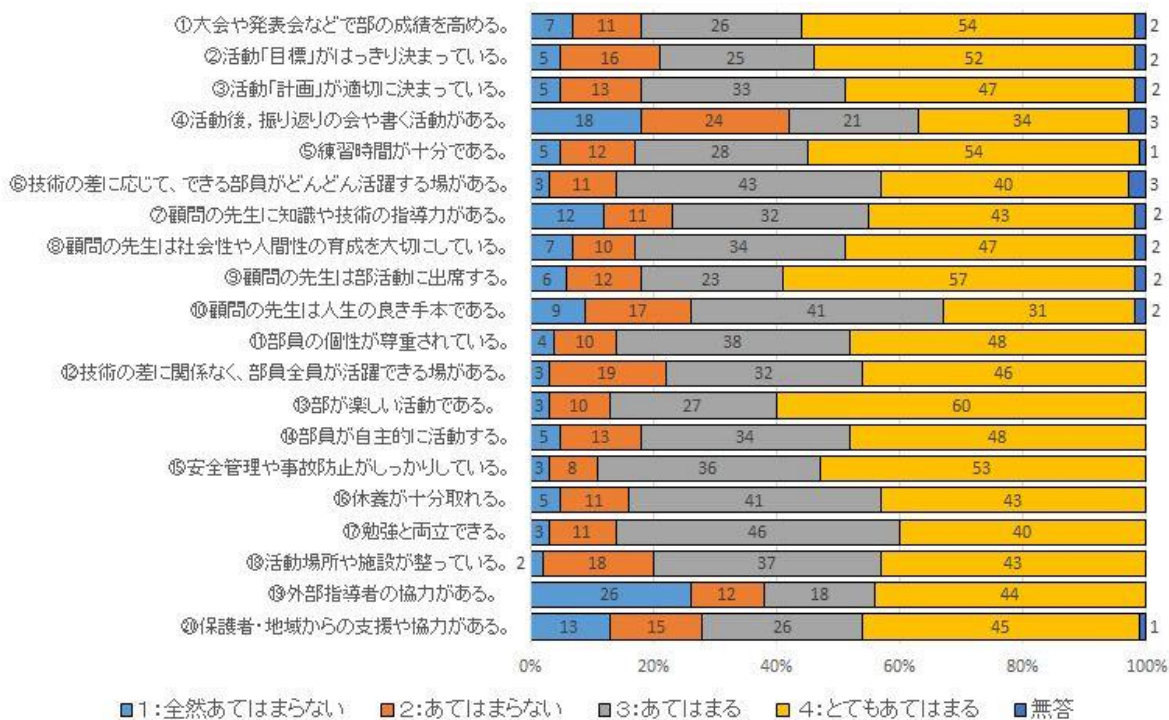


図4 活動内容 (中学校)

中学校の活動内容について図4に示す。3:あてはまる(60%以上80%未満) 4:とても

あてはまる(80%以上)の肯定的評価は、①大会や発表会などで部の成績を高める(80.0%)、②活動「目標」がはっきり決まっている(77.0%)、③活動「計画」が適切に決まっている(80.0%)、④活動後、振り返りの会や書く活動がある(55.0%)、⑤練習時間が十分である(82.0%)、⑥技術の差に応じて、できる部員がどんどん活躍する場がある(83.0%)、⑦顧問の先生に知識や技術の指導力がある(75.0%)、⑧顧問の先生は社会性や人間性の育成を大切にしている(81.0%)、⑨顧問の先生は部活動に出席する(80.0%)、⑩顧問の先生は人生の良き手本である(72.0%)、⑪部員の個性が尊重されている(86.0%)、⑫技術の差に関係なく部員全員が活躍できる場がある(78.0%)、⑬部が楽しい活動である(87.0%)、⑭部員が自主的に活動する(82.0%)、⑮安全管理や事故防止がしっかりしている(89.0%)、⑯休養が十分取れる(84.0%)、⑰勉強と両立できる(86.0%)、⑱活動場所や施設が整っている(80.0%)、⑲外部指導者の協力がある(62.0%)、⑳保護者・地域からの支援や協力がある(71.0%)。

ほとんどの項目で肯定的評価が80%を超える。特に、「部員の個性が尊重」「部が楽しい活動」「安全管理・事故防止」「勉強と両立」が高い。一方、「活動後の振り返りの会や書く活動」「外部指導者の協力」が他に比べ20ポイント低い。主体的な学びの観点から、活動への興味・関心とゴールイメージをもたせ、見通しをもって取り組み、自己の活動を振り返り、さらに次への挑戦意欲につなげる等、部活動への問題意識、問題解決過程、振り返り・改善を自ら組み立て自ら舵取りをする活動体験が少なかったことが考えられる。

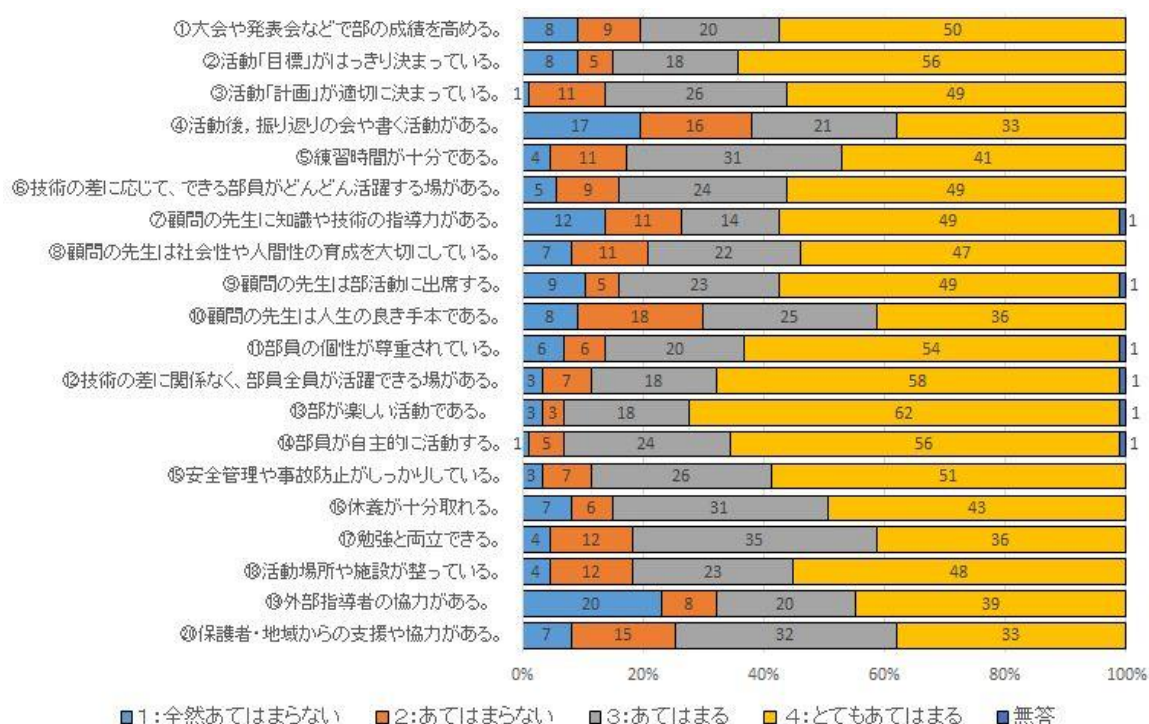


図5 活動内容（高等学校）

高等学校の活動内容については図5に示す。①大会や発表会などで部の成績を高める(80.5%)、②活動「目標」がはっきり決まっている(85.1%)、③活動「計画」が適切に

決まっている (86.2%), ④活動後、振り返りの会や書く活動がある (62.1%), ⑤練習時間が十分である (82.8%), ⑥技術の差に応じて、できる部員がどんどん活躍する場がある (83.9), ⑦顧問の先生に知識や技術の指導力がある (72.4%), ⑧顧問の先生は社会性や人間性の育成を大切にしている (79.3%), ⑨顧問の先生は部活動に出席する (82.8%), ⑩顧問の先生は人生の良き手本である (70.1%), ⑪部員の個性が尊重されている (85.1%), ⑫技術の差に関係なく部員全員が活躍できる場がある (87.4%), ⑬部が楽しい活動である (92.0%), ⑭部員が自主的に活動する (92.0%), ⑮安全管理や事故防止がしっかりしている (88.5%), ⑯休養が十分取れる (85.1%), ⑰勉強と両立できる (81.6%), ⑱活動場所や施設が整っている (81.6%), ⑲外部指導者の協力がある (67.8%), ⑳保護者・地域からの支援や協力がある (74.7%)。

高等学校でも肯定的評価が 80% を多く超えている。特に、「部が楽しい活動」「部員が自主的に活動」が 90% を超える。次に「安全管理・事故防止」「計画が適切に決まっている」「技術の差に関係なく部員全員活躍できる場」が 90% 近い。一方、「活動後振り返りの会や書く活動」「外部指導者の協力」が 20～30 ポイント低い。高等学校でも、目標・目的意識を持たせ、目標達成への見通しを持たせ、振り返りを通して自分と向き合う等の活動体験は少なかったと考えられる。

中学校。高等学校共通の問題としては、土日の活動時間に係る長時間勤務¹⁴及び専門性を考慮し、活動時間や専門的指導を補完し、活動内容に対する満足度及び質的向上を図る意味でも外部指導者等との連携・協力を得ることは必要である。

自己指導能力育成の視点から肯定的評価の比較を図6示す。「振り返りでの会や書く活動」の項目が「楽しい」「自主的」「目標が決まっている」「楽しい」と比べると、中学校・高等学校共に 20 ポイント以上低く、自己指導能力を育成するための自己決定の場の機能に関する経験が少ない。部活動指導に当たり、生徒が目標達成に向け見通しを立てたり振り返ったりして、自らの課題を自覚し解決する意欲を

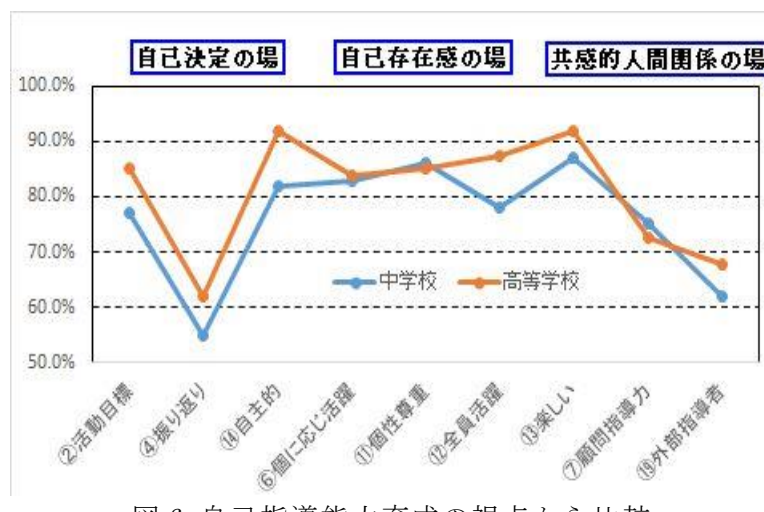


図6 自己指導能力育成の視点から比較

を持たせる活動を計画的に取り入れ、主体的に学ぶ態度を育むことは、思考力・判断力・表現力等の育成とともに、これから求められる「資質・能力」を備えた自己形成を図ることにおいても重要である。自己決定の場の充実により深い学びのある活動が期待できる。

次に、「今一度振り返って、良かったこと、自分の人生を変えたこと、望むこと、或いは、問題点」に関する自己認識状況より、様々な出会いや体験により多くのことを学んだことが確認できた。「礼儀や上下関係の大切さを学び自立に大いに役立ち、技術以外に責任感、忍耐力と継続力、精神力、体力・運動能力を高めることができた。」を共通に受け止め

ている。また、「大きな声で挨拶ができ、気配り、心配りの大切さを身に付けた。」「何事にも積極的に活動できるようになった。そして、友達が増え、人脈が広がり、趣味・特技の幅が広がった。」「苦手だったコミュニケーションもでき友人の存在が自分の人生を変えた。」「先生は技術より社会に出たときのマナーや人との関わりを大切したので、社会に対する考え方や自分の性格が大きく良い方向に変わった。」等、人としての在り方を学び、指導者や先輩・後輩との人間関係が豊かで、勇気や心の支えとなるキーワードを得ていると思われる。

一方、「もっと勉強しておくべきだった。」「面倒くさがらずやっておけばよかった。」「もっと自主的に活動をすればよかった。」「途中で投げ出すのでなく最後までやり通せばよかった。」等の後悔の念、「休みが無かった。もう少し、友達と遊ぶ時間、勉強する時間が欲しかった。」「部活の良い悪いは顧問の先生も関係すると思った。部活に入っていた期間がもったいないと思う。」等の問題意識を抱いている。一人一人が様々な環境の下で、多種多様な経験やふれあいを積み重ね、悩みや苦しみを乗り越え自己実現を図ってきたことについて、振り返ることによって自己と向き合い成長と認識状況を整理し、その中から誇りや意味を見出し、自己指導能力の自己形成を自覚・認識していることがうかがえる。

そこで、この自己認識状況について、生徒指導の3機能とアクティブラーニングの視点から分析したものを表3に示す。自己決定の場、自己存在感の場、共感的人間関係の育成に対応する、主体的な学び（主体性）、対話的な学び（協働性）、深い学び（能動性）の要

	主体的な 学び (主体性)	対話的な 学び (協働性)	深い学び (能動性)	
自己決定の場	○ ○	▽		○部活に入るまでは熱中するものがなかったが、熱中することができた。協力する力や集中力がついたと思う。責任感の強さと勉強の両立することへの集中力を学んだ。 ○高校で精神的肉体的にもつらい事を体験してよかった。粘り強くやり抜くことで自分にはできる自信を持てた。
自己存在感の場	▽ ▽ ▽	▽ ▽ ▽	○ ○ ○	○中学校で吹奏楽に入ったことで、練習は長く厳しく先輩はすごく怖かったけど、忍耐力と達成感を持って、自分に自信が持てるようになった。あの時、あんなに辛くても頑張れたから今も頑張れると思える。中学では部長、高校では副部長をさせていただいたことで、責任感も身についた。 ○広響と共演する場や大きな演奏会等、色々と発表の機会をいただいた。すごくためになることばかりだった。 ○選手としてマネージャーとして、違う目線で見える体験をしたことで、周りの人を見ることができ良かった。 ○陸上競技部のマネージャーとして、それまで関わりの無かった陸上の知識や選手を支える存在の大切さを知ることができて良かった。
共感的人間関係の育成	○ ▽ ▼	○ ○ ○	▽ ○ ▼	○人間関係が広がっていき校内だけでなく校外の人ともたくさんのお会いがあった。 ○中学では続けられなかったが高校では続けられたのでよかった。高校の部活は自分やみんなを尊重でき楽しくできたことは良かった。協働性や時には妥協することの大切さを学んだ。 ○中学の部活の先生との出会いで人間性を学んだ。人の役に立ちたいと前以上に強く思った。人のために自分に何が出来るか考え教えてくださった先生のように私も伝えていきたいと思う。 ▲顧問は試合の時だけ関わる。エントリーや競技役員をしていたが感謝している。 ●自分を鍛える良い機会だった。しかし顧問の先生に詳しい知識が無かったため個性を伸ばすことが残念だった。

表3 自己認識状況

素との関係が見出された。自己存在感の場や共感的人間関係の育成の機能に関しては、主体性、協働性、能動性の要素を含む内容が多いことが認められた。自分を語る語彙も豊富で具体的であった。自己決定の場の機能に対しては、協働性や能動性の要素に関する認識を示す記述の具体は認められなかった。部活動において、自らの活動について目的・問題意識を持ち、振り返り改善するといった自己コントロール力の意図的な養成が重要である。特に、自己決定の場の機能化と、これに対応して、主体的な学び、対話的な学び、深い学びに関する要素を意図的・計画的に指導することは重要である。そして、個人内評価の充実を図り、個々の成長や悩みに寄り添いながら、自信や勇気を持たせて困難な状況を乗り越えていく経験の積み重ねに基づく自己認識の進化を図る工夫が重要である。

おわりに—成果と課題—

部活動は、通常の教育課程では得難い、幅広く深い対人関係や集団活動経験を積む機会として期待されており、本研究においても人格形成が図られ、その意義や効用が見出された。

- (1) 部活動への参加意図は、「身体を鍛える」「特技を伸ばす」「精神力をつける」等をはじめ、自発的・自主的であり将来等への目的意識も明確であることが認められた。
- (2) 部活動を通して、「忍耐力」「責任感」「協調性」「先輩や後輩との関わり」等を得る中で、協力し合い友情を深めるといった好ましい人間関係を築きながら自ら人格の形成に向け、獲得した能力・態度・礼儀を自己認識し自己形成への努力が確認できた。
- (3) 活動内容の肯定的評価は、ほとんどが80%以上であり、部活動が自分の成長や経験において、満足感、充実感、効力感、達成感等を実感していることが認められた。
- (4) 活動内容の評価項目において、自己指導能力の育成に着目すると、「自己存在感の場」や「共感的人間関係の育成」が機能していることが確認できた。部活動の意義や自分の成長や将来への有益性を自己認識していることが認められた。

(1)から(4)より、ただなんとなく練習をこなす、苦しいことをやりとげた気持ちにならないよう、目標・計画設定や反省等をその場限りにせず、主体的な学びに繋がるよう深みのある部活動にする必要がある。そのために、言語活動を充実し部活動への関わりを自ら考え、実行する。さらに実行する中で省察を繰り返し、考えや感情を整理し、自覚を深める。例えば、自分と向き合う心の支えノート等を作成する等の工夫をして、①今日の目標(目的)②自分の状態(段階)③課題解決の方策④意識して取り組んだこと⑤振り返り(まとめ)など、部活動に関する自己評価能力を高める工夫・改善が重要であることが見出された。

一方、一人一人の健全な成長を促し、現在・将来の自己実現を図る自己指導能力やアクティブラーニングに結びつく要素の機能化が十分なされていないと思われる課題も見出さ

れた。

- (5) 活動内容に対して約 20% が否定的な評価をしている。部活動を通して、満足感、充実感、効力感等をあまり実感できず過ごしていたことが認められた。生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、活動についての意義や価値及び成長のための課題を考えさせながら、一人一人の思いや悩みに寄り添い汲み取る丁寧な対応の必要性が認められた
- (6) 「自己決定の場」を体験している学生が少ない。この主体的な学びの少ないことが、協働性、能動性へも影響があることが見出された。部活動を通して学ぶことの意義や社会との関係の意味・価値づけを行い、部活動への内発的な動機を高めるとともに自己調整と持続力に基づく自己形成に向けて、自己認識を深める振り返りの会や書く活動の工夫改善が重要である。こうした主体的・対話的で深い学びを通して、身についたことが何に結びつくのか、自分でより深く考え、仲間と対話し支え合いながら、小さな成功体験の積み重ねと自己への勇気と自信を持たせ、より高いレベルへの自己成長への挑戦を促していくことが求められる。
- (7) 指導者の専門性の課題、長時間労働の問題への対応の必要性が見出された。スポーツや文化及び科学等に精通した指導者など地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等との協働システムによる環境の中で、部活動を体験した学生はわずかであった。参加しやすく指導の充実した実施形態、休養日や活動時間の適切な設定など、生徒のバランスのとれた生活や成長への配慮が必要である。さらに科学的なトレーニングの導入（メンタル・テクニカル・フィジカル）、栄養学、人間関係トレーニングなど指導内容の工夫改善等、指導者や生徒の負担軽減及び活動内容の充実・改善としても重要な課題である。

(5) から (7) より、部活動において、一人一人に寄り添う指導と助言を絶やさないことが必要で、より深い問題意識と新たな挑戦意欲が芽生えるように働きかけることが重要である。これにより活動の意味付け・価値付け・省察・気づきの共有・課題発見・積極的試行・社会貢献性を意識させる。さらに、自信・勇気・誇りを持たせる振り返りの場の設定とその機能化は重要である³⁾。新学習指導要領¹⁵⁾では、部活動について「教育課程外の学校教育活動と教育課程の関連」「学校教育が目指す資質・能力の育成」「持続可能な運営体制」が加えられた。この趣旨の具現化のためにも、これから求められる「資質・能力」の育成に資する部活動の重要性とその充実の必要性が見出された。

引用・参考文献

- 1) 横井彩奈「部活動が与える自己効力感への影響 —達成場面と人間関係に着目して—」『研究所報』 60, pp.122-132. 2011
- 2) 中澤篤史, 西島 央, 矢野博之, 熊谷信司「中学校部活動の指導・運営の現状と次期指導要録に向けた課題に関する教育社会学的研究—8 都県の公立中学校とその教員への質問紙調査

- をもとに」『東京大学 大学院 教育学研究科 紀要』第48巻, pp. 317-337 2008
- 3) 小川 潔, 岡田大爾「プロジェクト学習的アプローチによる主体的・対話的な学びへの試行」
『広島国際大学 教職課程 教育論叢』第8号, pp. 11-19. 2016
 - 4) 関 喜比古「問われている部活動の在り方～新学習指導要領における部活動の位置づけ～」
『立法と調査』No. 294, pp. 51-59 2009
 - 5) 清水 将「高等学校における運動部活動の教育課程上の位置づけに関する検討」『東亜大学
研究紀要』第14号, pp. 17-32 2011
 - 6) 文部科学省（中央教育審議会）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学
習指導要領等の改善について（答申）」平成20年1月17日, p39, p42.
 - 7) 文部科学省「中学校学習指導要領」平成20年3月, pp. 15-19.
 - 8) 文部科学省「高等学校学習指導要領」平成21年3月, p. 8.
 - 9) 文部科学省「小学校学習指導要領」平成20年3月, p. 102.
 - 10) 石田晴彦, 亀山恵介「中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響—部活動集団の特徴と部活
動への意欲に着目して—」『愛知教育大学 教育実践総合センター 紀要』第9号, pp. 219-225
2006
 - 11) 石原 剛「運動部活動がもたらす効用の要因分析—愛媛県の高等学校を対象として—」『政
策研究大学院大学 教育政策プログラム』pp. 4-96 2012
 - 12) 西垣完彦「高等学校運動部顧問教師の部活動指導意識タイプ別にみた生活と意識の特性—
部活動指導意識と関連する要因の分析から—」日本体育学会第35回大会, pp. 17-34. 1984
 - 13) 静岡県東部中学校（1990）（<http://web.thn.jp/ninjinhouse/s-bukatudou-enquete.html>）
「部活動に関するアンケート」
 - 14) 文部科学省（運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議）「運動部活動の在り方に
関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～」平成25年5月27日,
pp. 1-17.
 - 15) 文部科学省「中学校学習指導要領」平成29年3月, pp. 11-12.